

Title	役割語から考える自称詞「わし」の方言性と出現時期
Author(s)	黒崎, 佐仁子
Citation	聖学院大学論叢, 23(2) : 1-14
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2778
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

〈原著論文〉

役割語から考える自称詞「わし」の方言性と出現時期

黒 崎 佐仁子

Characteristics of First-person Pronoun “Washi”

Satoko KUROSAKI

In *anime* and *manga*, there are various expressions called *Yakuwari-go* (role language). *Yakuwari-go* are expressions typically used by characters in *anime* and *manga* that are not used in the real world. There are many such characters in *anime* and *manga*. This paper focuses on expressions used by the character Hakase (“Old Scientist”).

Kinsui (2003) examined *ja* (a part of the predicate) used by characters in popular books from the Edo period to the present and stated that the “role language” of “Hakase” resembles a sociolect used in the Edo period which, as a result, displays the characteristics of a western Japan dialect. This paper, which examines the usage of *washi*, a first-person pronoun in materials from the Edo period such as a dialect dictionary, texts on dialects, popular books and Japanese language textbooks, confirms that *washi* is characteristic of the “role language” of the character Hakase.

Key words; role language, first-person pronoun, dialect, Edo period comics

Key words; 役割語, 自称詞, 方言, 江戸時代, マンガ

1. はじめに

小川 (1973 : 1) が「言語が communication の means だとすれば言語を学習して通じないことは何のために言語を学習したか分からなくなり (略) 外国語の教育はもっと実際に役立つようになるべきである」と述べているように、現在の日本語教育では、「買物や食事の注文等、日常生活の基本的な場面での簡単なやりとり」(河内 1988 : 93) や「読解, 講義聴解, 小論文作成などが独力でできる能力」(木村 1973 : 12) などの実用能力に視点が置かれている。しかしながら、倉八 (1992) がメリーランド大学⁽¹⁾ で調査を行い、結果を以下の通り報告しているように、全ての日本語学習者が実用能力を求めて日本語を学んでいるとは限らない。

- (1) 日本語を勉強する動機に関しても、道具的動機因子よりも、日本への純粹興味因子が強く、日本への興味、関心から日本語を勉強している傾向が伺える。(略) アメリカ人は、仕事という明確な目的で来日した場合にも、日本語を道具という意識で捉らえるのではなく、自分の内発的な興味関心から日本語をおもしろいと認識して学習していることが確認された。(p. 136)

本稿では、日本および日本語に興味を持つきっかけになり得るものとして、アニメ・マンガを取り上げ、その中に出てくる日本語の表現について考察する。アニメ・マンガが日本への興味を引き出していることは、国会で国立メディア芸術総合センターの設立が議論されてきたことや、2007年1月から2月に行われた文化庁メディア芸術祭の開催にあたり、当時の文化庁長官近藤信司が次のように述べている⁽²⁾ ことから明らかである。

- (2) デジタルアート、ゲーム、アニメ、マンガなどのメディア芸術は、広く国民に親しまれ、新たな芸術の創造や我が国の芸術全体の活性化を促すとともに、諸外国より「クール・ジャパン」として注目を集め、我が国への理解や関心を高める上で重要な役割を果たしております。

2. アニメ・マンガの言葉

JAPAN FOUNDATION 国際交流基金のウェブサイトには次のような記事がある⁽³⁾。

- (3) 「アニメ・マンガの日本語」Webサイト公開！

世界中の若者の間で、今、日本のアニメ・マンガは大人気です。日本語学習者の多くがアニメ・マンガをきっかけに日本語を学び始めるとも言われています。しかし、さまざまなキャラクターや幅広いジャンルなど、アニメ・マンガの日本語には、教科書や辞書には載っていない表現も多く、アニメ・マンガを日本語で理解するのはなかなか難しいもの。そこで、国際交流基金関西国際センターでは、アニメ・マンガ好きの日本語学習者のために、趣味の延長として楽しみながら日本語・日本文化に興味をもってもらえるサイトを目指して、アニメ・マンガに現れるキャラクターやジャンルの日本語を楽しく学べるEラーニングサイト「アニメ・マンガの日本語」を開発しました。(略)

(「JF 便り 日本語教育編 23号」2010年5月)

外務省所管の独立行政法人である国際交流基金がこのようなウェブサイトを開設したことから

も、アニメ・マンガの言葉に対する関心の高さが伺える。

金水（2003）は、「役割語」という用語を提示し、アニメ・マンガに出てくる「博士」「田舎者」「関西人」「お嬢様」「異人」などの言葉を分析し、その言語特徴がなぜその役割に認識されるのかについて述べている。金水（2003）の「役割語」の定義は以下の通りである。

- (4) ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。（p. 205）

本稿では、役割語の中でも博士語の言語特徴である自称詞「わし」に焦点を当てる。これは、金水（2003）が文末表現を中心に博士語を分析しており、自称詞「わし」には分析の余地があると判断したためである。

3. 博士語

金水（2007）は、「そうじゃ、わしが知っておる」のようなアニメやマンガに登場する博士および老人の言葉の特徴を以下のようにまとめている。

- (5) 「A=B」の関係を表すとき、標準語ではBの後ろに「だ」をつけるが、老人語・博士語では「じゃ」をつける。また否定を表す表現として、標準語では動詞の後ろに「ない」をつけるが、老人語・博士語では「ん」をつける。さらに、一人称代名詞として、老人語・博士語ではよく「わし（博士語では、さらに「吾輩」）を用いる。（p. 98）

具体例を挙げる。

- (6) おるんじゃよ この中に……ワシのにらんだ 犯人がな!!
 (阿笠博士『名探偵コナン 13』 p. 168)
- (7) アトム きてくれ アトム わしじゃ お茶の水じゃ
 (お茶の水博士『手塚治虫絵コンテ大全第1巻 鉄腕アトム』 p. 60)
- (8) わしの1週間分の食料を……おまえ いったい なにしにきたんじゃ?
 (亀仙人『DRAGON BALL 2』 p. 138)
- (9) みんなの衆もそろそろお気づきのことと思うが……この娘はわしの孫ぢゃ!!
 この柔らは、物心つく前からわしが柔道の英才教育を施した、柔道の天才ぢゃ!!

(猪熊滋悟郎『YAWARA! 1』 p. 168)

- (10) あっ これなんか どうじゃ 次郎長の三度笠とカッパじゃよ
わしのえらんだプレゼントがこの子に幸を……

(さくら友蔵『ちびまる子ちゃん 7』 p. 21)

金水 (2003: 4) は「これらの特徴の対立は、実はそのまま日本の東西方言の対立に重なる」として、以下のような表を提示している。

	〈博士語〉	〈標準語〉
断定	親代わりじゃ	親代わりだ
打ち消し	知らん, 知らぬ	知らない
人間の存在	おる	いる
進行, 状態等	知っておる/とる	知っている/てる

	西日本方言	東日本方言
断定	雨じゃ, 雨や	雨だ
打ち消し	知らん, 知らへん	知らない, 知らねえ
人間の存在	おる	いる
進行, 状態等	降っておる/とる	降っている/てる
形容詞連用形	降りよる等	
一段活用動詞	赤 (あこ) うなる	赤 (あか) くなる
サ変動詞命令形	起きい, せえ等	起きろ, しろ等

西日本方言の断定表現として「じゃ」と「や」が挙げられているが、このうち「じゃ」のみが博士語として認識される。この理由は、真田 (1990) が述べているように「や」が「じゃ」の変種として新しく生み出されたものであるため、「や」が西日本方言として認知されるより前に「じゃ」が博士語・老人語として定着したからだと考えられる。

- (11) ジャとヤは、ともに標準語のいわゆる断定「だ」に対応する方言形式で、話し手の判断を叙述するものである。ヤはジャを母胎として生まれ、ジャの領域内で新しく広がったものである。このことは日本語史の研究上、また言語地理学的研究においてもすでに実証済みである。今日も、ヤはその前線において、いまだ強い勢力を保ちつつ拡大していることが各地で報告されている。(p. 76)

金水（2003）は『猿飛佐助』、『怪談牡丹燈籠』、『牛店雑談安愚楽鍋』、『浮世風呂』⁽⁴⁾の例より、特に「じゃ」「ぬ」「ん」「おる」に注目して、「このように〈老人語〉として上方風の語法が採用された背景には、江戸語形成の過程が深く関与していると思われる」（p. 26）という結論を導いている。

江戸時代の言語使用特徴に関しては、佐藤（2002）が分かりやすく解説している。

- (12) 江戸時代には士農工商の身分制度が確立していたため、それがことばの使い方にも反映されていた。武士のことばと町人のことばには大きな差異があり、町人層でも知識階層に属する人々と庶民とではことばの使い方に著しい差があった。壁を隔てて相手が見えなくても、ことばを聞いていれば、その人がどういう階層の人物かわかるというほど階層差ははなはだしく、こうした状況は江戸ばかりでなく地方都市にまで及んでいたようである。（p. 340）

このような状況の中、当時の人々は「上方語的な言い方が伝統的に正しい」（小松 1985：21）という意識を持っていた。そのため、「若年・壮年層の人物が、いち早く江戸の新共通語である東国的表現を自分たちの言葉として駆使していた時点で、老年層は未だ上方語的表現を規範的な言葉として手放さなかったというような構図が、江戸においてある程度現実に存在した」（金水 2003：26）と考えられ、「明治期に入ると、江戸語の文法を受け継いで新しい〈標準語〉が形成されていく。ところが芸作品、演劇作品の中では、伝統的に「老人」=上方風の話し方という構図がそのまま受け継がれていく」（金水 2003：27）という過程を経て、アニメ・マンガの博士語・老人語が確立していったのである。

4. 自称詞「わし」

「そうじゃ、わしが知っておる」のような博士語表現は、江戸時代の社会階層と、それに影響される言語の階層分化にまで原点を求めることができる。そして、西日本方言が階層分化の象徴としての役を担っており、アニメ・マンガの博士は西日本方言を話す。つまり、博士語を解説するには「江戸時代」「西日本方言」がキーワードとなると言えるだろう。

金水（2003）は自称詞「わし」に関する考察を行っていないため、本稿では「わし」の方言性と出現時期から自称詞「わし」を考察する。

以下、自称詞「わし」の意味を『日本国語大辞典 第二版 第十三巻』より引用する。

- (13) わし【私】〔代名〕（「わたし」の変化したもの）自称。近世、主として女性が用いた。現在では、尊大感を伴って目下の者に対して、男性が用いる。（p. 1288）

4-1 方言性

国立国語研究所(1981)は東京および大阪の住人に対し、「あなたは御自分のことをいうとき(=一人称)、ふつう何といいますか」および、「それはどんな相手や場合に使いますか」という調査票による調査を行い、次のような結果を提示している。

(14) 全体の使用率で見ると、東京・大阪ともワタシが60%を越し、きわだって使用率が高い。

ワタシ以外で10%以上の使用率を持つ代名詞を順に見ると、

東京 ワタシ、オレ、ボク、アタシ、ジブン の5語

大阪 ボク、オレ、ワタクシ、ワシ、ジブン、ウチ の6語

となっており、東京ではアタシ、大阪ではワシ、ウチに特色がある。(p. 267)

このように東京と大阪だけを比較するのであれば、自称詞「わし」の使用率は大阪のほうが高いことになる。

しかし、大阪方言だけが西日本方言ではない。そこで、全国の方言について72地点で行った調査の結果を記載している『現代日本語方言大辞典』における自称詞の項目を調べた。結果を表1、表2、表3にまとめる。表1は、「わたし」に対応するものとして「わし」を挙げている地点数、表2は「ぼく」に対応するものとして「わし」を挙げている地点数、表3は「おれ」に対応するものとして「わし」を挙げている地点数を地域別にしたものである。「地点数」とは、各項目に掲載されていた調査地点の合計数である。

表1 「わたし」対応地点

	わたし	地点数
北海道	0	2
東北	1	11
関東	2	10
中部	5	13
近畿	2	9
中国	3	6
四国	0	5
九州	2	10
沖縄	0	6

表2 「ぼく」対応地点

	ぼく	地点数
北海道	0	2
東北	0	11
関東	1	10
中部	3	13
近畿	6	9
中国	4	6
四国	2	5
九州	1	10
沖縄	0	6

表3 「おれ」対応地点

	おれ	地点数
北海道	0	2
東北	0	11
関東	0	10
中部	2	13
近畿	5	9
中国	1	5
四国	1	4
九州	0	10
沖縄	0	6

まず、「わたし」に対応する方言として「わし」を挙げているのは、青森、埼玉、奥多摩、富山、長野、岐阜、静岡、愛知、三重、十津川、鳥取、広島、油木、大分、宮崎の15か所、「ほく」に対応する方言に「わし」を挙げているのは埼玉、富山、七尾、愛知、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、十津川、島根、岡山、広島、油木、徳島、愛媛、大分の17か所、「おれ」に対応する方言に「わし」を挙げているのは、埼玉、七尾、愛知、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、十津川、岡山、油木、愛媛、大分の13か所である。

表1、表2、表3は便宜上地方名で区分しているが、東日本・西日本の方言境界線を定めるのは容易ではない。問題になるのは、中部地方であるが、牛山(1969)による文法事項による方言境界線を採用するならば、長野・静岡が東日本、富山・岐阜・七尾・愛知が西日本となるため、「わし」は西日本的だと考えられるだろう。

表4 「わし」の使用地域

	東日本	西日本
「わたし」対応地点	5	10
「ほく」対応地点	1	16
「おれ」対応地点	1	12

この結果から、「わたし」に対応する方言として「わし」を持つ地域には、東日本・西日本の差があまり見られないが、「ほく」「おれ」に対応する方言として「わし」を持つのは、西日本地域であると言える。ここから、西日本では「わし」が東日本よりも一般に広く用いられていると考えることができるだろう。

時代を遡り、文政4年(1821)の『裏舗滑稽 烏歌話』に興味深い資料があることを東條(1949)が紹介している。これは、「肝心の方言については上下両冊とも表紙の裏表に江戸と京都の方言を対照表に作って掲げてある」(p.187)というものであり、そこには「京にて わし を 江戸にて わつち」と書かれている。同様に、杉本(1998)も天保11年から12年(1840-1841)の『浪速みやげ』の中にある「大阪江戸 風流ことば合わせ」を、「幕末の江戸語と大阪語との比較として、やがて明治期にはいる前のことば資料としてさんこうになると思う」(p.332)と翻刻しているが、そこには「大阪にて わしじゃとて 江戸にて わっちだつて」とある。つまり、江戸時代には「わし」は西日本方言だと解釈されていたのである。

4-2 出現時期

佐藤(1983)は自称詞の出現時期について以下のように述べている。

- (15) 「わたくし」という言葉は、古くは「公」に対する名詞として用いられていた。(p. 335)
- (16) 「わたくし」が名詞から一人称の代名詞として用いられるようになった確実な時期としては室町時代を考えるべきであろう。(p. 336)
- (17) 江戸時代には「わたくし」から「わたし」の形を生み出した。これも男女を問わず使用したが、武家の男性の言葉としての例は見だし難く、「わたくし」に比べかなりくだけた感じのものであったことが考えられる。(p. 337)
- (18) この「わたし」がさらに「わたい」を生み、「わっち」「わし」を生じたものと言える。(p. 337)

つまり、自称詞「わし」は江戸時代に出現したものであり、本稿がキーワードとする「江戸時代」との関係が見出せる。実際に、江戸時代以前には「わし」が使用されていなかったことは、福島(1988)からも分かる。

福島(1988)は、『万葉集』、『源氏物語』、『徒然草』、『宇治拾遺物語』、『天草版イソップ物語』⁽⁵⁾に見られる自称詞を調べて、次のような表⁽⁶⁾にまとめている。

表5 万葉・源氏・徒然

	万葉	源氏	徒然
あれ(吾)	45	1	0
おのれ(己)	3	27	33
わ(我)	77	53	0
われ(我)	440	356	19

表6 宇治拾遺物語

おのれ(己)	53
わ(我)	155
われ(我)	163

表7 天草版イソップ物語

わ(我)	8
われ(我)	85
それがし(某)	17
み(身)	20
わたくし(私)	8

ここで自称詞として取り上げているものは「あれ・おのれ・わ・われ・それがし・み・わたくし」であり、「わし」は含まれていない。このことから奈良、平安、鎌倉、安土桃山時代には「わし」が使用されていなかったと考えられる。

江戸時代の自称に関しては、峰谷(1982)が次のように述べている。

- (19) 江戸本では、第一人称代名詞として、「おれ」「下拙」「こち」「こっち」「拙者」「手前」「身」「身共」「わし」「私」「わたし」「わっち」「われ(ら)」「われわれ」が見られる。このうち武士の例は、だいたい「拙者」「手前」「身」「身共」「われわれ」であり、特に「身共」「拙者」が中心となる。(p. 98)

また、田中(1983)は、「文化・文政期ごろからの江戸語の敬語の大体の様子は、左のようなもの

4-3 江戸本

江戸語の資料として、まず『浮世風呂』『浮世床』『春色梅児誉美』を取り上げる。

『浮世風呂 前編』は文化6年(1809)に、『浮世床』は文化10年(1813年)に刊行された式亭三馬による滑稽本である。『春色梅児誉美』は、為永春水作による人情本で初編は天保3年(1832年)に刊行された。本稿では『浮世風呂』の前編、『浮世床』の初編、『春色梅児誉美』の初編のみを資料として扱う。調査資料は以下から収集した。

(23) 中村通夫(校注)「前編 男湯之巻」『浮世風呂』岩波書店 1957 pp.47-106.

本田康雄(校注)「浮世床 初編序」「浮世床 初編上」「浮世床 初編中」「浮世床 初編下」『浮世床 四十八癖』新潮社 1962 pp.13-113.

中村幸彦(校注)『春色梅児譽美』岩波書店 1962 pp.42-238.

『浮世風呂』で用いられていた自称詞は、「おいら・おれ・わし・わたし・わたくし」の5種類であった。「わし」は以下のように用いられていた。

(24) 田舎出の下男, じうのうへおきをつつけて持來りしが此はなしを聞いて

三助「モノ、金を拵べい云て山事が悪い事だネ。わしイ国サ居たとき、珍事てうような事が有けエ。爰でエ、何云がな。己方で薯蕷と云ます (pp.70-71)

(25) かき「イヤ、おれはねぶつて居る盲だ くり「イヤ、おれもねぶつてゐる盲だ かき「又口まねをしをるか。盲とあなどつて くり「ハテナ、そふいふ声は聞いたやうな声だ かき「フフム、なるほど、わしも聞たやうだ ト小くびかたふけ くり「ハ、ア、柿の都殿ではござらんぬか かき「いかにも貴公は栗の都どのではござらんぬか (pp.96-97)

(25)のかき(かきのいち)は、自称詞「おれ」と「わし」を使用しており、一人の人物が自称詞を使い分けている。かきのいち、くり(くりのいち)を途中から「貴公」と呼び、敬語を使っている。このことから、敬語を用いるような場合には「おれ」よりも「わし」を使用していたのではないかと考えられる。同様に、(24)の三助は、その言葉から上方の者ではないことが分かるが、下男であるため、聞き手に対し丁寧に話そうと「わし」を用いていると考えることができる。

『浮世床』で用いられている自称詞は、「おいら・おれ・おら・わし・わたくし・わつち」の6種類で、「わし」は以下のように用いられていた。

(26) トいふ所へかみがたもの商人体の男入來たりて

作「どうぢや鬢さん」 びん「や、お出なさい。作兵衛さんきのふは何所はお出なすつた」

- 作「ハ。きのふは北国へ」 びん「お飛脚にか」 作「なんぞいふてかい。そりや寺岡平右衛門ぢやはいの。わしぢやて、北国へ行いではいの。あほういはんすな」(p. 69)
- (27) びん「壺分、エ、それで上げるつもりかエ」 作「マア、あがらんにもせい マア きかんせ。その壺分を私が母者に進ぜたら、マ どないに悦ばしやろうぞい。(略)」(p. 69)
- (28) びん「性根が江戸にかなふものかな。まづ物事が素早いはな。上方の達引のざまを見たがい、「庄兵衛どん一寸橋詰まで出てもらをかい」 トいふとの▲片ツ方の相手めが、同じく気が長いだ。「なんぢやわしが事てごんずか」「ヲ、いかにもこなんの事でごんす」(pp. 70-71)
- (29) びん「(略) 私もあんまりぢやさかい、駕籠の衆、掛声をせんかいトいふたら、跡な奴めがナ、掛声して能けりゃこちでする、いらぬ左平次ぢやという様な事いふたはい。最う私もたまらんさかい、そんなら掛声せいでもだんないが、なぜに跡な駕籠に乗越れたのぢやといふたら、ありや三枚ぢやといふさかい、私⁽⁷⁾も三枚ぢやといふたら。おまへのは三枚波ぢや、マア三枚並で掛声してかけられる事か、おまへ爰へ出てかいて見なされ、トゑらいドス声できめをつたによつて、わしもしゆつと消て仕舞た」(p. 77)
- (30) 作「わしがはたきがまだあるはい。アノナ初めて下た折に、どこやらの家へ娼妓買に往た。まづゑいな。何や角が済んで仕舞て、床へ往たは。ゑいか。私ひとりつき離されて勝手がしれんぢやあるまいか (略)」(p. 79)

『浮世床』で自称詞「わし」を用いていたのは、上方の商人である作兵衛であり、『浮世床』では「わし」は西日本方言として用いられていることになる。

『春色梅兒譽美』の自称詞は「おいら (おるら)・おれ・おら・わし・わたい (わたひ)・わたし・わたくし・わちき・わつち」の9種類で、「わし」は「上るり」部分を除くと、(31)のみである。

- (31) 尼「さぞしんと思ひなさるふ。今日来たわしが心のうち、釈尊さまでもござんじあるまい。とはいふものゝ、案じたより産が易いと世の諺。産ぬう子どもの身の素生、わしが年来妹ぞと思ふてくらしのおそのどのの、実の娘のお由女郎。(p. 218)

(31)は尼の言葉であり、『春色梅兒譽美』では「わし」は丁寧な話し方とともに用いられている。

以上の例から江戸時代の「わし」は西日本方言または丁寧な表現とともに用いられる自称詞として認識されていたと考えることができる。

4-4 日本語教材

次に、『会話篇』『日本語会話』を取り上げる。『会話篇』(Kuaiwa Hen)は、イギリスの外交官であったアーネスト・サトウが明治6年(1873)に刊行した日本語学習書である。『会話篇』は、ロー

マ字で書かれた会話文1文に対し、英訳が1文ずつ付けられている。自称詞が用いられていたのは、「watakushi」の含む文が28、「watashi」を含む文が4、「washi」を含む文が3であった。

- (32) 35. Washi ya sô itté mo shôchi shi ya shimasumai.
35. Even if I say so, I son't suppose he will agree. (pp. 28-29)
- (33) 20. Washi no sata ga nai uchi ni jibun shitori no kangae dé yatcha ikanai.
20. I am much concerned at your speaking thus. (pp. 30-31)
- (34) 37. Washi wa yoru tokoro ga aru kara, koré kara o wakaré môshimasu.
37. I have to call somewhere, and so I'll say good by. (pp. 50-51)

外交官であったアーネスト・サトウが丁寧度の高い「watakushi」を多用し、「washi」を3例のみに留めたのは、「washi」は理解できればよい自称詞だと捉えたからだろう。しかしながら、少ないながらも「washi」の記載があるということは、当時の日本では外交官が「washi」を耳にする機会が少なからずあったということになる。

『日本語会話』(Colloquial Japanese, or Conversational Sentences and Dialogs in English and Japanese)は、アメリカの宣教師であったサミュエル・ロビンズ・ブラウンが1863年に刊行した日本語会話集である。『日本語会話』には、自称詞について以下のような説明がある。

- (35) The emperor, for the pronoun of the first person, use (朕) Shin, which may signify, subtle, recondite. The Taikun, or any noble man of high rank, would use Yo (余 or 矛) when addressing inferiors, and Watak'shi if speaking to a superior. To a friend they would say Sessh's (拙者) meaning. Officers of government would use Sessh's and watak'shi, in like circumstances. Washi is use by persons of inferior station, when speaking to those under them. The meaning of Watak'shi, is still uncertain. It is the word most generally used for the first person. Washi and Ore are used by the common people for I. (p. x x x vi)

外交官であったアーネスト・サトウが丁寧な日本語をまとめているように、ブラウンの会話集も丁寧な日本語を記載しているものと考えられる。ブラウンの自称詞の説明には The emperor, The Taikun, つまり天皇、將軍の用いる自称詞が書かれていることから、この会話書に見られる日本語の丁寧度は高いと思われる。そのため、Washiが persons of inferior station によって用いられるとはあるが、江戸本で多用されている「おいら・おら・わちき」について説明されていないことから Washi を使用する者の身分が町人の中でも低かったとは言えない。少なくとも、天皇や將軍の言葉を聞く機会のある者が「わし」を耳にする機会があるということは、社会階層としてはそれ

ほど低くない地位のものが「わし」を用いていた可能性はあると考えられる。

また、江戸時代初期に刊行された外国人による日本語辞書『日葡辞書』、『日本大文典』のいずれにも「わし」は見られなかった。これは、自称詞「わし」の出現が江戸時代であり、江戸時代初期の段階では掲載するほどの使用がなかったことの表れだと考えられるだろう。

4-5 まとめ

以上、国立国語研究所調査、『現代日本語方言大辞典』より自称詞「わし」が西日本方言的表現と言えること、また、江戸本『浮世風呂』『浮世床』『春色梅児誉美』、江戸時代の日本語学習書『会話篇』『日本語会話』から「わし」は江戸時代から用いられていることを確認した。ここから、金水(2003)が役割語としての博士語を「西日本方言」「江戸時代」という観点から「じゃ」「ぬ」「ん」「おる」を中心に考察している結果が、自称詞「わし」にも当てはまることが分かった。

5. おわりに

本稿では、アニメやマンガで使用される役割語のうち、博士語を取り上げ、博士語の特徴である自称詞「わし」の方言性と出現時期を考察した。日本語教師という立場から役割語を扱うことは、日本語を道具としてではなく、日本語および日本・日本文化を純粋に興味の対象として捉えている学習者に対応するためには必要なことである。実際の社会生活において用いてしまうと不自然となる表現がマンガやアニメの世界では生き生きと使われており、日本語学習者が現実の言語表現と仮想現実の言語表現の違いを知ることは、現実で自然に話すためだけでなく、仮想現実を深く楽しむためにもなる。日本語学習者が楽しむことのできる日本語教育を目指すために、今後も幅広い役割語に注目していきたい。

参考文献

- 牛山初男「語法上より見たる東西方言の境界線について」『日本列島方言叢書8 中部方言考』井上史雄ほか(編)(『文学叢書』37 東洋大学1969の再録)1996.
- 小川芳男「外国語学習の方法と意義」『日本語教育』22号 日本語教育学会 1973年 pp.1-9.
- 河内千春「技術員研修員のための日本語教育—JICA大阪センターの日本語研修—」『日本語教育』66号 日本語教育学会 1988年11月 pp.91-97.
- 木村宗男「留学生に対する日本語教育の最終目標について」『日本語教育』22号 日本語教育学会 1973年12月 pp.10-16.
- 金水敏『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店 2003.
- 金水敏「第5章 近代日本マンガの言語」『役割語研究の地平』くろしお出版 2007 pp.97-107.
- 倉八順子「日本語学習者の動機に関する調査—動機と文化的背景の関連—」『日本語教育』77号 1992年7月 pp.129-141.
- 国立国語研究所『大都市の言語生活』三省堂 1981.
- 小松寿雄『江戸時代の国語 江戸語』東京堂 1985.

- 真田真治『研究叢書84 地域言語の社会言語学的研究』和泉書院 1990.
 佐藤喜代治(編)『講座日本語の語彙 第11巻 語誌Ⅲ』明治書院 1983.
 佐藤亮一『お国ことばを知る 方言の地図帳』小学館 2002.
 杉本つとむ『日本語の歴史』八坂書房 1998.
 田中章夫『東京語—その成立と展開』明治書院 1983.
 土井忠生(訳)『邦訳日葡辞書』岩波書店 1980.
 東条操『方言の研究』刀江書院 1949.
 日本国語大辞典第二版編集委員会, 小学館国語辞典編集部(編)『日本国語大辞典 第13巻 第2版』
 小学館 2002.
 平山輝男〔ほか〕編著『現代日本語方言大辞典 第1巻』明治書院 1992.
 平山輝男〔ほか〕編著『現代日本語方言大辞典 第6巻』明治書院 1993.
 福島邦道『語史と方言』笠間書院 1988.
 峰谷清人「歌舞伎の語彙—『五大力恋絨』の場合」『第2巻 講座日本語の語彙の特色』明治書院 1982
 pp. 93-120.
 ロドリゲス(著) 土井忠生(訳)『日本大文典』三省堂 1950.

参考資料

- アーネスト・サトウ『会話篇Ⅰ』東洋文庫 1967.
 青山剛昌『名探偵コナン 13』小学館 1997.
 浦沢直樹『YAWARA! 1』小学館 1987.
 さくらももこ『ちびまる子ちゃん〔7〕』集英社 1991.
 式亭三馬(著) 本田康雄(校注)「浮世床 初編序」「浮世床 初編上」「浮世床 初編中」「浮世床 初
 編下」『浮世床 四十八癖』新潮社 1962 pp. 13-113.
 式亭三馬(著) 中村通夫(校注)「前編 男湯之巻」『浮世風呂』岩波書店 1957 pp. 47-106.
 式亭三馬(著) 中西善三(校注)「初編卷之上」「初編卷之中」「初編卷之下」『日本古書全書「浮世床」』
 朝日新聞社 1955 pp. 67-159.
 為永春水(著) 中村幸彦(校注)『春色梅兒譽美』岩波書店 1962.
 手塚治虫『手塚治虫絵コンテ大全第1巻 鉄腕アトム』河出書房新社 1999.
 鳥山明『DRAGON BALL 2』1986.
 Brown, S. R., *Colloquial Japanese, or Conversational Sentences and Dialogues in English and Japanese,
 Together with an English-Japanese Index to Serve as a Vocabulary, and an Introduction on the
 Grammatical Structure of Language.* Presbyterian Mission Press, 1863.⁽⁸⁾

注

- (1) 「メリーランド大学は、横田基地に在し、Asian Study 専攻の学生の必修科目として日本語教育が
 行われている。」(倉八 1992: 131)
 (2) <http://plaza.bunka.go.jp/ex/outline/message.html> (2010/11/03 参照)
 (3) <http://www.jpff.go.jp/j/japanese/report/23.html> (2010/11/03 参照)
 (4) 『猿飛佐助』は1914年、『怪談牡丹燈籠』は1884年、『牛店雑談安愚楽鍋』は1871年-1872年、『浮
 世風呂』は1809年-1812年の作品である。
 (5) 『万葉集』は783年、『源氏物語』は1001年、『徒然草』は1331年、『宇治拾遺物語』は1221年、
 『天草版イソップ物語』は1593年の作品だと言われている。
 (6) 便宜上、表番号は本稿の通し番号とする
 (7) 中西(1955)では、この「私」にも「わし」というルビが振ってある。
 (8) <http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/senjin/colloquialjp/pageindex.html> (2010/11/03 参照)